

オーストラリアの野生化ラクダ

高橋 春成*

Feral Camel in Australia

Shunjo TAKAHASHI

I 分布と発生過程

(1) 分 布

オーストラリアは、野生化ラクダが生息する世界で唯一の地域である。当地で野生化したラクダはヒトコブラクダ(写真1)で、推定生息数は約2万頭といわれる。

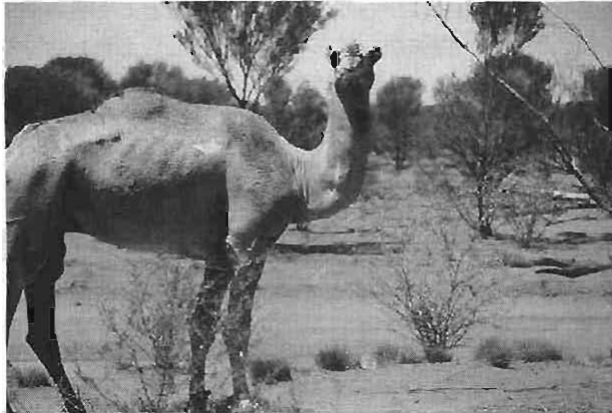


写真1 野生化ラクダ(1981年、ニューサウスウェールズ西部)

かつて、原種である野生のヒトコブラクダはアラビア半島の乾燥地に生息していた。しかし、現在では家畜化されたものがアフリカ北部や北東部、中近東、中央アジアにみられるだけで、野生のヒトコブラクダはアラビア半島から姿を消してしまった。今日、野生化したものとはいえ、野生の状態のヒトコブラクダが生息するのはオーストラリアだけである。

野生化したラクダは、ウェスタンオーストラリア、サウスオーストラリア、ノーザンテリトリー、クィンズランドの各州と連邦政府直轄地にひろがる乾燥地に適応している(高橋, 1994, 1995)。野生化ラクダは、内陸の乾燥地にみられる湖の周辺などで、アカシア低木林(マルガ)をはじめとする幅ひろい植物を食料として生活している。

野生化ラクダは、通常小さな群れで行動しているが、早ばつの厳しい時には水や食料を求めて数百頭の群れとなることがあるといわれる。彼らはきわだって移動性に富む動物で、その行動範囲はひろい。

野生化ラクダの捕食者にはディンゴがあげられるが、病気になったり傷ついた子ラクダが捕食の対象になるにとどまる。しかし、乾燥地に適応をとげている野生化ラクダも、早ばつの厳しい時には水や食料の不足から多数のものが死ぬといわれる。

(2) 発生過程

オーストラリアにおけるラクダの野生化の発生過程を、主にMcKnight (1969, 1976) を参考にしながら整理する。

オーストラリアに最初のラクダが導入されたのは1840年のことで、アデレードとメルボルンに陸揚げされた。その後、1860年には大陸縦断の探検隊用に“アフガン”¹⁾と呼ばれた3名のラクダ使いとともに24頭のラクダが持ち込まれた。ラクダはブタやヤギなどに比較すると約半世紀遅れて導入されたが、それはこの家畜が内陸部にひろがる乾燥・半乾燥地の探検や開拓用の家畜として必要であったからである。

オーストラリアでは19世紀の中頃より内陸部の探検や開拓が本格化するが、それをすすめていくにおいて、乾燥した環境にすぐれて適応力のあるラクダは欠くことのできない家畜であった。1840年～1907年にかけて、内陸部にひろがる乾燥・半乾燥地の探検や開拓用の家畜として外部から導入されたラクダは1～2万頭にのぼった。

当時探検以外にもラクダの用途はひろく、運搬用の家畜として各方面で使用された。たとえば、鉱山では食料、器具類、機械類、鉱石などを運搬し、またヒツジ牧場では刈りとったヒツジの毛の運送を担った。さらに、鉄道の敷設(写真2)、ウサギ防除柵や州境の柵の設置、電信線の取り付け工事、井戸掘りでも運搬用家畜として使用された(写真3)。その他、パトロールや郵便配達時の乗物としても使われた。まさに当時のラクダは“砂漠の船”であった。なお、ラクダのミルクや肉が利用されることはまれであった。



写真2 鉄道の敷設のために鎖を引くラクダ
(フロンティアラクダ牧場内のラクダ博物館、
ノーザンテリトリー)



写真3 運搬用家畜として使用されたラクダ
(フロンティアラクダ牧場内のラクダ博物館、
ノーザンテリトリー)

オーストラリアでラクダの野生化が生じたのは、19世紀の後半とみられる。1860年代に行われた内陸部への探検時にすでに少数のラクダの逃亡があったといわれ、19世紀後半の探検時にはラクダの逃亡や遺棄はそれほどめずらしくなかったようである(Long, 1988)。

しかし、ラクダの野生化が目立って進行するのは1920年代にはいってからである。この頃より、オーストラリアでは道路網の整備やモータリゼーションがすすみ、飼育価値の低下したラクダの遺棄が各所でみられた。その結果、1920年代から1930年代にかけてラクダの野生化が進行した。

II 有害性と活用面

野生化したラクダは、食料として依存しているアカシア低木林（マルガ）を食害している。また野生化ラクダの活動は、乾燥地に生息する在来の小動物にも影響をもたらしていると推察されている。

農業面への被害としては、砂漠周辺の牧場の柵の破損や、早ばつ時における家畜用の水飲み場の破壊が指摘される。柵の破損は、ディンゴやウサギなどの侵入を許すとともに家畜の逃亡を生じさせる。また早ばつ時には、飲水をめぐって放牧家畜と競合する。

一方、野生化ラクダは次のように活用されている。野生化ラクダは時折アポリジニによって捕獲され、駄獣として利用されてきた（McKnight, 1969, 1976）。また今日、捕獲された野生化ラクダの一部が中東にラクダレース用や肉用として輸出されている。野生化ラクダの肉は、近年レストランのグルメ用のメニューにも登場している。その他、サーカスや動物園用の動物としても輸出されているし、医学や科学用の実験動物としても活用されている。

しかし、遠隔地の乾燥地に野生化しているラクダの捕獲は困難を伴う場合が多い。野生化ラクダの駆り集めにはヘリコプター、トラック、オートバイなども使用されているが、早ばつ時に水飲み場などで一挙に捕獲する場合を除くと、費やす労力や経費の割りに成果は乏しい。

捕獲されたラクダはまた、アリススプリングス周辺のラクダ牧場などで飼育され、乾燥地における観光のアトラクションになっている。ここでは、牧場内でのラクダ乗り（写真4）やラクダを使ったアウトバックへの旅行ができ、さらにラクダの売買も行われている。野生化ラクダのコントロール方法には生け捕り（生け捕り後は活用されることが多い）と銃殺がみられるが、遠隔地で人目にふれず生活している野生化ラクダの実態はよく知られておらず、今後はその生態や乾燥地における在来の生態系への被害などに関して情報収集をはかる必要がある。

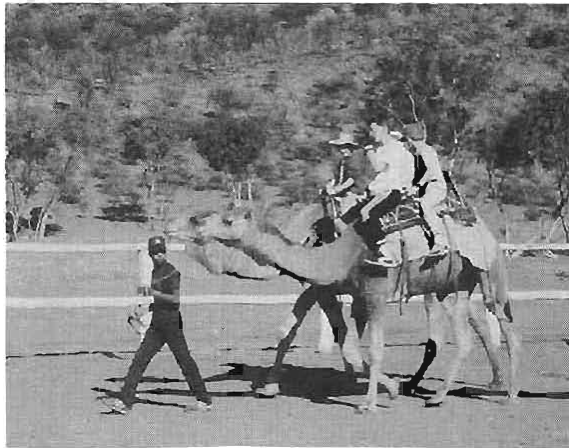


写真4 牧場内でのラクダ乗り（1987年、バージニアラクダ牧場、ノーザンテリトリー）

注

- 1) “アフガン”と呼ばれたラクダ使いには、エジプト人、ベルシア人、インド人、トルコ人なども含まれた。

文 献

- 高橋春成 (1994) : 『荒野に生きる—オーストラリアの野生化した家畜たち』どうぶつ社, 101ページ.
- 高橋春成 (1995) : 『野生動物と野生化家畜』大明堂, 316ページ.
- Long, J.L. (1988) : *Introduced birds and mammals in Western Australia*.
Agriculture Protection Board of Western Australia, 56p.
- McKnight, T. (1969) : *The camel in Australia*. Melbourne University Press, Melbourne, 154p.
- McKnight, T. (1976) : *Friendly vermin: a survey of feral livestock in Australia*. University of California Press, 22, Berkeley, 104p.

Summary

Feral camels were introduced for draught and transport, and used particularly in the exploration of the arid area. As motor transport improved, camels were released or escaped and formed the feral population.

They may damage the native plants and animals of arid area as well as fences and watering points. On the other hand, feral camels and captured camels are used in the tourist industry.